

明治のアンデルセン

—— 出会いから翻訳作品の出現まで

川戸道昭

アンデルセンの童話が日本の読者にはじめて受け入れられるようになったのは一体いつ頃のことだろう。それは誰がどういう目的で受け入れていったのか。その成果が実を結んで日本の児童が「マツチ売りの少女」や「人魚姫」のはなしに耳を傾けることができるようになったのは一体いつ頃のことであったのか。アンデルセンに代表される個性豊かな西洋童話の数々が、日本の子どもたちの情操を育む心の糧として不可欠のものとなっていて今日、その日本における受容の淵源を明らかにし、それが日本の児童文学史上、あるいは児童教育史上担った役割を検証してみることが大変意義のあることのように思われる。おそらくそうした意味を十分に理解したうえでのことだろう、これまでも何人かの優れた研究者たちが明治期のアンデルセンの受容の問題と取り組んできた。なかでも、北欧文学に精通した山室静氏は、一九六八年に国立国会図書館において「明治期に紹介されたアンデルセン」と題する講演を行い、その中で今後の日本のアンデルセン研究が解明しなければならぬ重要な課題を提起した。それは、アンデルセンの作品が日本に紹介される時期に関する問題で、要約すると、その時期が、欧米諸国はもちろん、中国やインドなどよりさらに遅れて、著者の死後十数年も経ってからのことであったのは一体いかなる理由に基づくのかということである。明治のアンデルセンの受容史をたどる上でも大変重要な問題なので、講演の核心部分について山室氏自身の言葉を引用してみることにしよう。

《アンデルセンが童話を書きだしたのは、彼が30才の頃からでありまして、明治8年に70才で死んでおります。日本で最初の翻訳紹介が出たのは明治21年ですから、彼が童話を書きだしてから、ほとんど50年以上も、半世紀以上も紹介されていなかった。これはちょっと不思議な感じがするんですがね。……アンデルセンが最初の童話集を出すと、それがもうすぐドイツ、イギリスという風にだんだん紹介されてきて、世界中で読まれてきた。……ところが今のところでは、私たちに知られている日本での最初の紹介は、明治21年の「女学雑誌」の紹介および、在一居士、河野政喜という方が単行本で訳した「王様の新衣裳」（いわゆる「はだかの王様」）であって、偶然に同じものが二人の人により同じ年に紹介された。これがアンデルセン紹介の最初なのですが、もう少しよく調べてみると、もう四、五年くらい前から紹介されてもいんではないかという気がするんです。／＼たとえば……ジュール・ベルヌの作品は、明治11年頃から盛んに紹介されておる。アラビヤナイトなんか明治8年頃から知られていますし、イソップは明治6年、これはもともと江戸時代にも訳されていましたけれど、明治

6年に新しい訳が出ています。それからフランスで近代の創作童話を初めて書いた人とされるフェヌロンの「テレマック」（冒險）というのも明治13年に早くも紹介されております。それから、「ロビンソン漂流記」とかゲーテの「狐の裁判」なども。そういう点でアンデルセンも当然もう一寸早く紹介されてもよかった、という気がするんであります。》

山室氏の論旨を簡単に要約するとこういうことだ。すなわち、欧米に広く流布したアンデルセンの童話が、日本においては作者の死後十数年経つまで紹介されないのは一体どうしたわけか、よく調べてみれば、もう四、五年古い明治十六、七年の翻訳が出てくる可能性もあるのではないか、なぜならば、『アラビアン・ナイト』や『狐の裁判』はすでにそのころ翻訳されていたのだから、と。この文章の中でもっとも注目しなければならないのは、最初の、日本への紹介がなぜ遅れたのかということである。それは、日本におけるアンデルセン受容の根幹に関わる問題で、われわれとしても真剣に注意を傾けてみなければならぬ問題だと思いが、残念なことに、山室氏の述べることには肝心なところで一つ大きな誤解があるように思われる。日本におけるアンデルセンの紹介（翻訳）の歴史と、日本におけるその受容の歴史とを同一視してしまっているのである。アンデルセンの翻訳がないということとアンデルセンの受容がなされないということとを同一視した結果、日本においてアンデルセンの作品が作者の死後十数年経つまで紹介されないのはなぜかという疑問が発生した、そんなふうを受け取れるのである。しかし、本当にそうなのか。日本においてアンデルセンの作品は明治二十年前後まで受け入れられることがなかったのか。この問題は、単なる翻訳を通しての紹介の歴史としてではなく、もっと広い視野に立ったアンデルセン受容の全体的な問題として捉えていく必要がある。なぜならば、それは、明治前半の翻訳文学というものが、今とは違って、かなり限定された特殊な社会事情の中から生まれたという理由による。当時の翻訳文学は、同時代の文化活動の総体を映し出す鏡というにはほど遠く、それとはまったく別個の文学作品の受容ルートも充分考えられるためである。

よく知られるように日本の近代翻訳文学は明治十一年の『花柳春話』をもってはじまるといわれる。これはイギリスのブルワー・リットンの才子・佳人の物語を翻訳したもので、それを「欧州奇事」と銘打って売り出したところ、当時の読者の好尚に投じて、爆発的な人気を博した。以来、世の出版界は、第二、第三の『花柳春話』を求めて、西洋の文学作品の紹介に狂奔する。西洋の恋愛ものが当たったのならば空想科学小説はどうだ、あるいは滑稽小説は、戦記ものはどうだろう。これからは海外に雄

飛する時代だから、冒険小説だって読まれるに違いない。かくして、巷の書店には、「西洋」「泰西」の文字を冠した翻訳小説がところ狭しとばかりに並べられるようになった。その流れがずっと尾を引いて、明治二十年前後に一つのピークを迎える。あしかけ十年にも及ぶその翻訳小説ブームを根底で支えたのは、外でもない「西洋」と「奇談」という二つの要素であった。山室氏の文章の中に登場する『アラビアン・ナイト』は『開卷 驚奇 暴夜物語』、『狐の裁判』は『独逸 奇書 狐の裁判』、あるいは『ロビンソン・クルーソー』は『絶世 魯敏孫漂流記』というように、ほとんどがこの「西洋」の「奇談」を求める傾向の中から生まれた作品であったことが表題や角書きからもみてとれる。アンデルセンの翻訳もこうした流れと無縁でなかった証拠に、日本で最初の翻訳書の表題は『世 奇談 王様の新衣裳』となっている。

このように明治前半の翻訳文学というのは、現在のそれとは違い、かなり限定された社会的要請の中から生み出されていたものである。人々の政治への関心、文明に対する期待、新奇な出来事を求める心、それが西洋の文物へのあこがれと相まって、翻訳文学を生み出す下地を構成していた。その流れに即した作品はすぐにも翻訳されるが、そこからはずれた作品は一向に顧みられない傾向にあった。加えて、それらの翻訳作品は、子どもの読者とはおよそ無縁の、大人のための読み物であったことにも留意する必要がある。そのような大人のための「奇話」「奇談」のなかに、『アラビアン・ナイト』や『狐の裁判』が登場したからといって、すぐにアンデルセン童話の翻訳に結びつかないのは、むしろ当然のことであったといえるだろう。実際、今日アンデルセンと並んで人々の間で人気の高いグリム童話なども、その最初の翻訳が発表されるのはやはり明治二十年前後のことであり、ペローの「シンデレラ」や「眠れる森の美女」などはさらに遅れて明治二十九年までまたねばならなかった。要するに、アンデルセン童話の翻訳は、『アラビアン・ナイト』や『狐の裁判』の翻訳が生み出された明治十六、七年頃に出していなければならぬ必然性はなかったということになる。

しかし、ここでわれわれが注意しなければならないのは、翻訳がなかったということと、アンデルセンの作品が読まれなかったというのは、まったく別個の問題であるということだ。繰り返し言うが、当時の翻訳文学は、社会の一部の流行を反映するものではあっても、文化の総体を映し出す鏡とはなっていなかった。換言すれば、アンデルセンの翻訳はなくとも、それが日本の読者に受け入れられていた可能性は充分に考えられるのである。したがって、山室氏のように、アンデルセンの翻訳の歴史を、そのまま受け入れの歴史とみなしてしまうのは、やはり大きな誤解につながるといわざるをえない。われわれはもっと広い

視野に立って、再度日本におけるアンデルセンの受容の根源を問い直してみる必要がある。はたしてそうした総合的な受容の歴史においても、アンデルセンは明治二十年前後になるまで受け入れられることがなかったのか。もしそうであったとすれば、山室氏の言うようにそれこそほんとうに「不思議」という外はないだろう。

しかし、簡単に総合的な受容の歴史とはいいが、実際に翻訳と結びつかない受容の流れをわれわれはどうやって検証していくのか。それは非常にむずかしいことではあるが、方法がないわけではない。とくに、アンデルセンの場合は、明治のごく早い段階から学校教育や家庭教育と深く結びついてきた。その学校教育、家庭教育における受け入れのルートをたどっていけば、日本におけるアンデルセンの受容の歴史はかなりの部分において明らかにされるはずである。たとえば、当時の中等・高等教育の現場では、西洋の言語を学ぶのに多くは舶来の教科書をもってしたが、そうした教科書の中に、西洋各国に広く浸透していたアンデルセンやグリムの童話が掲載されるケースは少なくなかった。それらの教科書に掲載された作品の内容を確認しその受け入れ状況をたどっていけば、日本の読者が、いつの時点で、どのような作品に接することができたのか、はっきりした流れをつかむことができるはずである。

そのような考えに立って、実際、わたしはアンデルセンの作品が、外国語、とくに英語の教科書を仲立ちとして日本に受け入れられていく状況を、明治四十五年間の学校教育の中にとどてみた。その結果、日本におけるアンデルセン受容の歴史は、山室氏がいうように「四、五年」どころか、十四、五年も時代を遡るということがわかってきた。しかも、そうした学校教育の現場では、これまでほとんど指摘されたことのない「マッチ売りの少女」「モミの木」「みにくいアヒルの子」というようなアンデルセン童話を代表する作品が読まれていたというきわめて興味深い事実も浮かび上がってきた。それだけではない、その調査を通して明らかにしたのは、そうした学校教育の現場で用いられた教科書とアンデルセンの翻訳のあいだにかなり密接な関係が認められるということである。たとえば、上の引用文で山室氏が「偶然に同じものが二人の人により同じ年に紹介された」といっている「王様の新衣裳」の翻訳であるが、二人の紹介が重なったのは必ずしも「偶然」というわけではなかった。山室氏の講演記録の巻末に付された「明治期に紹介されたアンデルセン作品目録」には名前があげられていないが、実は、同じ作品の翻訳は明治十九年の十一月にさらにもう一点発表されている。それは「偶然」が二度重なったというのではなくて、「王様の新衣裳」の英訳を掲載した『ナショナル第五読本』が日本の教育界に普及しはじめたという確たる理由に基づくものであった。その英訳

教科書がアメリカのバーンズ社から刊行されたのは一八八四（明治十七）年のことであり、二年後の明治十九年になると日本の教育界にも広く普及し始め、それを目にした英語教育関係者が次々に日本の読者に紹介していったというのが、短い期間に同じ作品が三度も翻訳されることの真の理由であった。

このように、明治期のアンデルセンの受容の歴史というのは、当時の学校教育と切っても切れない関係にあった。その源をたどれば、明治初年の中等・高等教育の起源にまで遡る。それを唯一の受け入れ窓口とする受容の時期がしばらく続いて、明治二十年代に入ると、日本の家庭教育においてもようやく西洋の童話を取り入れていこうという気運が起ってくる。その結果、様々な女性向け、少年・少女向けの雑誌にアンデルセンやグリムの作品の翻訳が掲載されていく。さらに、明治三十年代になると、『国語読本』の一部にもそれは取り入れられる、あるいは、「家庭お伽噺」や「教育お伽噺」と銘打った書物が盛んに刊行され、そこにもアンデルセンの童話は掲載される、というように明治の児童教育そのものに大きな影響を投げかけていった。それらの作品を読んだのが、新生日本の将来を背負って立つ少年・少女たちであったということは、アンデルセンの作品が日本の文化全体に及ぼした影響は決して鮮少なものとどまらなかつたはずである。われわれは、この明治の学校教育・家庭教育におけるアンデルセンの受容の流れをたどることによって、従来の研究が必ずしも充分に捉えきれなかつたその受容の全体像を明らかにしていく必要がある。そして同時に、それらの作品を必要とした明治の教育・文化の実態にも改めて詳しい調査の光を投げかけてみる必要がある。このような観点に立って、以下、明治四十五年間のアンデルセンの受容の歴史を詳しく検証してみることにする。

一 アンデルセンとの出会い

日本の読者がアンデルセンの作品にはじめて接することができたのは、時代も遙かに遡って、明治ひと桁代にまで達する。アンデルセンが祖国デンマークにおいて息を引き取る一八七五（明治八）年には、少なくともかなりの数の若者がそれを読んでいたということを示す確かな証拠が残されている。日本の読者を彼の作品に導くきっかけをつくつたのは、イギリスのチェンバーズ

(W. & R. Chambers) 社が発行した「スタンダード・リーディング・ブックス」という教科書であった。これはいわゆる舶来の英語読本の一つで、『第一読本』から『第五読本』までの五巻からなっていて、その『第二読本』に「マッチ売りの少女」が、『第三読本』に「モシの木」が、さらには『第四読本』に「野の白鳥」、『第五読本』に「みにくいアヒルの子」が、というように『第二読本』以降の各巻に一話ずつ、合計四話アンデルセンの作品が、著者名入りで掲載されている。英訳とはいえ、かなり忠実に原作を訳出したもので、たとえば『第二読本』に掲載された「マッチ売りの少女」の冒頭を現在巷間に出回っている日本語訳などと比べてみてもまったく遜色のない、次のような優れた訳文であった。

It was dreadfully cold, it snowed, and was getting quite dark, for it was evening—yes, the last evening of the year.

Amid the cold and the darkness, a little girl with bare head and naked feet was roaming through the streets. It is true she had on a pair of slippers when she left home, but they were not of much use, for they were very large; so large, indeed, that they had hitherto been used by her mother; besides, the little creature lost them as she hurried across the street, to avoid two carriages that were driving at a fearful rate. One of the slippers was not to be found, and the other was pounced upon by a boy, who ran away with it, saying that it would serve for a cradle when he should have children of his own.

【大畑末吉訳「マッチ売りの少女」『アンデルセン童話集』2「岩波文庫」より】

「それは、たいへん寒い日でした。雪が降っていました。そして、あたりは、もう暗くならはじめました。それはまた、一年の一ばんおしまいの夜、つまり大みそかの晩でした。この寒い、そして、暗いなかを、一人のみずぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子もかぶらず、おまけにはだして、通りを歩いていました。でも、家を出た時は、それでも木ぐつをはいていたのです。けれども、そんなものが、なんのたしになるでしょう。それはとても大きな木ぐつでした。むりもありません。ついこのあいだまではお母さんがはいていたのですから。だから大きかったです。しかも、それすらさつき往來をいそいで横ぎろうとした時、なくしてしまつたのです。なにしろ二台の馬車がおそろしい勢いで走ってきたものですから。こんなわけ、木ぐつは片方見つかりませんでした。もう片方は、男の子がもって行ってしまいました。そして、いまに赤ん坊が生まれ

たらゆりかごに使えるよ、と言いました。》

初期の日本語訳が往々にして意識であったり抄訳であったりするのに対し、この英語訳はかなり原作に忠実な訳文であったということができるだろう。イギリスのチェンバーズ社からこの英語リーダーが出版されたのは一八七三年、すなわちアンデルセンが祖国デンマークで息を引き取る二年前のことであった。そして、少なくとも著者が亡くなる一八七五（明治八）年には、それが日本の中等・高等教育の現場でかなりの数の生徒たちによって読まれていたことを示す確かな記録が残されている。そうした記録をもとに日本の読者がはじめてアンデルセンの作品と出会う様子をたどってみるとというのが本章の目的である。

はじめてアンデルセン童話に触れた人々

まずわれわれが注目しなければならないのは、明治八年に発行された『東京英語学校教則』（以下『教則』と省略）という小冊子である。そこには、同校の「第一年 第五級」の教科書として「チャンブル氏第二読本」を用いる旨がはっきりと示されている。「第一年 第五級」というのは入学した最初の一年を二学期に分けた後半部分で、その「読方及ヒ綴字」の授業（週六時間）において、上記の「マツチ売りの少女」を掲載した『第二読本』がテキストとして用いられたと記されている。その記述だけでは、実際にアンデルセンの作品が読まれたかどうか定かではないが、同じ『教則』に、「在期中チャンブル氏第二読本ヲ卒ラシム」とあるところから、「マツチ売りの少女」を含めて『第二読本』に記載されたすべての内容に目が通されたことが推測可能となる。チェンバーズの『第二読本』というのは縦一六センチ、横十センチの小型本で、全体が一六〇頁あまりと頁数もそれほど多くないため、『教則』にあるように、週六時間ずつ半年かければ、「在期中」にそれを「卒ラシム」ことも十分可能な分量であった。ちなみに、このテキストが用いられた東京英語学校という学校であるが、それは一八七四（明治七）年十二月に東京外国語学校の「英語科」が分離独立してできた学校で、校舎は東京の表神保町にあった。桜井役著『日本英語教育史稿』（敝文社、一九三六年）によると、教員・生徒の数は、「内国人教諭五人、外国人教諭九人（米人一人、英人八人）生徒三百三十七人であった」という（明治八年三月の報告）。入学者の年齢は十三歳以上、十七歳までを原則とし、修学年数は「上等語学科」三年、「下等語学科」三年の、あわせて六年。ただし、専門学校（東京開成学校等）に進学を希望しその入学試験に合格したものは、「上等語学科」の

教科を修めずに専門学校へ進むことが許された（『東京英語学校規則』明治八年十一月刊）。その後、同校は、一八七七（明治十）年、東京大学の開設を機に、東京開成学校の普通科の下級クラスと併合されて東京大学予備門に改組されていく。つまり、この東京英語学校という学校は、主として東京開成学校やその後身の東京大学等への入学希望者が集まる、いわば当時の超エリート校であった。実際にそこで学んだ人物の顔ぶれを見ても、たとえば、加藤高明、嘉納伸之助（治五郎）、野村龍太郎、内村鑑三、天野為之、佐藤昌介、田中館愛橘、石川千代松、広井勇、宮部金吾というように、その後の日本の政財界や学界で活躍する著名人が数多く見受けられる。

さてその東京英語学校の「一年五級」で、「マッチ売りの少女」を掲載したチェンバーズの『第二読本』が読まれたということだが、同校においてチェンバーズの英語リーダーが用いられたのはそれだけにとどまらない。先ほど紹介した明治八年の『教則』によると、東京英語学校では、入学した一年目の前半（二年六級）に『第一読本』が、その後半に『第二読本』が、さらに二年目の前半（二年四級）に『第三読本』が、同じく後半（二年三級）に『第四読本』が、というように二年間で四冊のチェンバーズの読本を終わらせるスケジュールになっていた。このうち、アンデルセンの作品が掲載されているのは、『第二読本』（「マッチ売りの少女」所載）、『第三読本』（「モミの木」所載）、それに『第四読本』（「野の白鳥」所載）の三巻である。つまり、東京英語学校の生徒たちは、二年間で合計三つのアンデルセンの作品に触れることができたということになる。

興味をそえられるのは、それらの作品を彼らはどんな方法で学んでいたのかということである。そのことについては『教則』の「二年四級」の項に次のような記載がみえる。すなわち、「教師、稗史及び短キ小説ヲ講シ、生徒ヲシテ之ヲ口演セシメ」た、と。要するに、教師が最初にある「稗史」「小説」について講義をし、生徒はそれに続いて音読ないしは暗誦を行っていたということだと思いが、こうした西洋文学の教授法は、当時のお雇い外国人教師たちによってよく用いられた方法で、明治六年十月以来、東京開成学校や札幌農学校において英語・英文学の授業を担当したジェームズ・サマーズなども同様の方法で西洋文学を生徒に講じていた記録が残されている。注目すべきは、それを音読・暗誦したのが、十代前半から半ばにかけての感性豊かな少年たちであったということである。彼らは西洋文学者の模範的文章を朗読・暗誦することによって、そうした優れた文章に固有に備わるスタイルやリズムを肌で感じ取っていくことができたのである。

このような方法によって「稗史」「小説」の講義が行われたのは「語学」（一週六時間）の授業であったが、「二年四級」におい

てはそれ以外に「読方及ビ書取」という授業（二週六時間）があつて、そこでもチェンバーズの英語リーダーが用いられていた。その「読方及ビ書取」の項には「在期中チャンブル氏第三読本ヲ卒ラシム」とある。「語学」と「読方及ビ書取」を合わせると授業時間は週十二時間にも達し、その大半はチェンバーズの『第三読本』ただ一冊を使って授業が行われていた。われわれ現代人の感覚からすると、かなり常軌を逸した方法のように思われるが、洋書の輸入が極端に困難であつた当時にあつては、別に異常でも何でもなかつた。東京英語学校以外でも、英学を志す初学者が最初に手にする教科書は、外来の英語読本とせいぜいほかに算術や地理・歴史の教科書を二、三冊と相場が決まつていた。実際に、「二年四級」でその当時使われていた教科書を調べてみても、「チャンブル氏第三読本／連語篇／ロビンソン氏実地算術書／スペンセル氏第七及ヒ第八習字本／地球儀／地図」というように、テキストはわずか三、四冊しかなく、あとは地球儀や地図などの補助教材である。このうち「語学」と「読方及ビ書取」に關係するのは最初の二冊だけだから、一週十二時間の授業の大半はチェンバーズの『第三読本』を用いた授業であつたということが、『教則』に示された「教科書」の細目からも確認される。

豊かな感受性と柔軟な思考力を有する若者が一週十数時間もの時間をその講読や暗誦に費やしたとなると、当時の英語読本が彼らの精神形成に及ぼした影響力というのは絶大なものがあつたに違いない。それだけに、明治初年の中等教育の教場で使用された英語リーダーの役割には、われわれとしても大きな関心を寄せてみないわけにはいかない。大変興味深いことに、当時はまだ英語教科書に関する文部省の取り決めのようなもの存在せず、各学校は独自にそれを調達し、生徒に購入、ないしは借覧させていた。つまり、どのようなリーダーを使用するかはそれぞれの学校に決定権があつたわけで、われわれは各学校の使用教科書を調べることによって、逆にその学校の教育内容を推し量ることができるのである。

明治十年前後にもっとも広く利用されていた英語のリーダーは、アメリカのハーパー社 (Harper & Brothers) が発行したウィルソン・リーダーであつた。その頃の学校で使用される英語リーダーは、二、三の例外を除くと、ほとんどがウィルソン・リーダーであつたと断言できるほど、それは広く一般に浸透していた。たとえば、東京都の都政史料館が編纂した『東京の英学』（一九五九年刊）という書物には、明治十年以前に「東京府」に提出された五つの「英学私塾」の学科目表が掲載されているが、それらも、慶応義塾をはじめとする五つの学校のすべてでウィルソン・リーダーが使われていたとある。そのほか、愛知英語学校など地方の官立や私立の学校でも、やはり主流はウィルソン・リーダーであつたことが、今に伝わる様々な史料からうかがえる。

全国の学校にこれほどウイルソン・リーダーが浸透した理由は、版權取得が一八六〇（万延元）年と古く、幕末・維新时期に日本の先覚者が英語教科書を求める際に、すでに現地の教育界や出版界で一定の評価を得ていた教科書であったということが大きかったと思われる。そうした事情もあって、明治十年前後には、ウイルソン・リーダーは日本の英語教育に欠かすことのできない教科書の一つとなっていたのである。

ところがこのウイルソン・リーダーというのは、内容的にいうとかなり異色のリーダーで、チェンバーズのリーダーとは大分趣を異にしていた。そのもつとも大きな違いは、チェンバーズのリーダーが、文学作品を通して豊かな語学力や感受性を育むことに主眼をおいているのに対して、ウイルソン・リーダーのほうは、キリスト教による道徳教育・宗教教育を指そうという意図がきわめて顕著に認められる点である。たとえば、『第一読本』の内容を比較してみても、チェンバーズのリーダーのほうは、子羊やフクロウ、ネズミというような動物の登場する短文を用いて一通りの文章パターンを示した後、すぐに「シンデレラ」や「美女と野獣」、「赤ずきん」など世界の名作童話に入っているのに対し、ウイルソン・リーダーのほうは、多少物語らしき内容のでてくる後半になると、随所にキリスト教色の濃い文章が目立ち始める。たとえば、そうした文章の表題を書き出してみるだけでも、「神は寛大だ、神はすべてを創り給うた」（四章八課）、「子どもの朝の祈り」（四章十四課）、「汝、神は我を見給う」（四章十八課）、「子どもの夕べの祈り」（四章二十七課）、「子どもを祝福するキリスト」（四章三十課）、「神はすべてを創られた」（五章六課）、「神の正義は永遠に」（五章七課）という具合である。こうした違いは、『第二読本』、『第三読本』と進むにつれ、鮮明になりこそすれ、薄れることはない。ウイルソン・リーダーは、『第三読本』に至ると、冒頭の六十数頁すべてが「聖書からの物語」に当てられるほど、キリスト教色が前面に押し出されていく。一方チェンバーズの『第三読本』のほうは、エマソン、ワーズワス、ホーソン、アンデルセン、スモレット、バルザック、キャンベルというような世界の著名文学者の文章が中心となっていく。ウイルソン・リーダーが、ごく一部の例外を除いて、文学作品とはほとんど無縁であるのとは対照的である。

このように当時もつとも広く用いられていたウイルソン・リーダーと、東京英語学校など一部の学校で採用されていたチェンバーズのリーダーとは、同じ英語リーダーとはいっても、内容の点で大きな違いが見られた。どちらにも長所と短所があり、その優劣を即断するようなことはできないが、少なくとも、西洋文学の受容という観点から見た場合、前者は前者よりもはるかに大きな歴史的意味を有していたということができる。チェンバーズのリーダーが東京英語学校においてはじめて用いられたの

は、前にも述べたとおり明治七、八年であった。それは、いわば西洋文学移入史上の黎明期で、いまだ西洋の文学作品を繙く人などめつたにない時代であった。唯一例外は、お雇い外国人教師の存在した中等・高等教育の現場で、たとえば東京開成学校では、前出のジェームズ・サマーズがシェイクスピアやミルトンの作品を講じていたという記録が残されている。東京英語学校においてチェンバーズの英語リーダーが読まれたのは、これとまったく同時期の、日本でもっとも早い段階の西洋文学との出会いとして注目される。しかも重要なことに、サマーズの文学講義が、シェイクスピアやミルトン、トマス・グレイといった西洋文学の古典中心であったのに対し、東京英語学校の教室で読まれたのは、ペローの「ガラスの靴（シンデレラ）」や「赤ずきん」、アンデルセンの「マツチ売りの少女」や「モミの木」、それにグリム兄弟の「幸運なハンス」といった児童向けの名作が主流を占めていた。これ以前に日本の学童が西洋児童文学に触れたという記録は見あたらず、わが邦の西洋児童文学受容の歴史はこのチェンバーズの英語読本とともに始まったといっても過言ではないのである。

日本製英語教科書への影響

残念ながらチェンバーズの英語リーダーは、著作権の取得が一八七三年と遅く、すでに日本の教場に広く行きわたっていたウィルソン・リーダーの牙城を脅かすところまでは至らなかった。わたしの調べたかぎり、それを教科書として使用したのは、東京英語学校、東京開成学校、東京大学予備門というように、ごく一部の学校に限られていた。それらの学校では、とくに最初にあげた東京英語学校では、外国人講師にイギリス人が多かったために、アメリカ製のリーダーよりはイギリスで作られたリーダーが優先されたものと思われる。しかし数の上では劣勢であったが、それを読んだのが日本の官学の主流をなす有力校の生徒であったことから、その後の教育界・文学界に与えた影響は必ずしも鮮少なものとどまらなかった。アンデルセンをはじめとする西洋童話の数々が、そうした学校で学んだ生徒やその周辺にいた人々の胸に深く刻み込まれて、やがて彼らが政界や教育界の要職についた時、その結実を見ることになるのである。

たとえば、明治二十年代に入って文部省の手で編纂された英語教科書のなかに、同リーダー掲載の西洋童話が取り入れられたことなどは、その最たる例といえるだろう。しかもそれは、ペローの「ガラスの靴（シンデレラ）」と「赤ずきん」という、西洋児童文学を代表する作品であった。参考までに、チェンバーズの英語リーダーと文部省の英語読本の双方に掲げられた「赤ずき

ん」の結末部分を比べてみると、次のようなものである。

【Chambers's Standard Reading Books: Book I】

'Grandmother,' she said, 'how is it that your ears are so long?'

'The better to hear you,' was the reply.

'Why are your eyes so large?'

'The better to see you.'

'How are your hands so long?'

'The better to gripe you with.'

'But, grandmother, how is your mouth so wide, and your teeth so large?'

'The better to bite thee!'

And as the wolf said this, he sprang out of the bed on poor Little Red-Ridinghood, and swallowed the little maiden. Poor Little Red-Ridinghood!

【The Monbusho Conversational Readers. No. 3】

"Why, Granny!" said she, "How is it that your ears have grown so long?"—"The better to hear you," she said.—"Why are your eyes so large?"—"The better to see you."—"And why are your hands so long?"—"The better to grip you with."—"But, Granny! why is your mouth so wide, and why have you got so many teeth?"—"The better to eat you," growled the wolf, and with these words he sprang upon Little Red Riding-hood, and tore her to pieces.—Poor Little Red Riding-hood!

後者が前者をもとにして作られた文章であることは、赤ずきんがおばあさんに化けた狼に質問する文章の内容から推測できる。ペロロの原作では、赤ずきんは「どうしてそんなに長い手をしているの」ということにはじまって、どうしてそんなに「大きな

足」、「大きな耳」、「大きな目」、「大きな歯」、という順に質問を繰り返していくが、ここに引用した文章における順番は両者とも、「大きな耳」「大きな目」「長い手」「大きな口と歯」となっていて、「大きな足」についてはいずれも省略されている。そればかりか、原文にない「大きな口」が加えられる等、双方の文章には明らかな関連性が認められる。

この文部省の英語読本（正式には『正則文部省英語読本』）を編纂したのは、後に東大総長や文部大臣を歴任する外山正一であった。外山は、東京大学予備門で英語を教えた経験もあり、そこで用いられていたチェンバーズの英語リーダーについては、充分その内容を知りうる立場にあった。換言すれば、彼自身が編纂する英語教科書に、同リーダーに掲載された文学作品が採録されてもなんら不思議ではない状況があったということになる。

面白いことに、この『正則文部省英語読本』という教科書には、最初にある物語が掲載され、その後先生と生徒の間でそれについて意見を交換しあう「Conversation」なるコーナーが設けられていて、「赤ずきん」についても、先生が「この赤ずきんの物語をどう思うか」と質問をしたのに対し、生徒は「面白いけれど、これほど悲しい結末でなければいいのに」「その後みんな幸せに暮らしましたというシンデレラの終わり方のほうが、自分としては好きだ」という「会話」がそえられている。これを読めば、なぜ外山が『正則文部省英語読本』の中に「ガラスの靴」と「赤ずきん」の二話を採録したのか、その意図はある程度明瞭になる。要するに、彼は、教材としての適否や道徳性よりも、生徒の心に文学的な興味や関心呼び起こすことのほうを優先させたのである。罪のないおばあさんと赤ずきんが狼に食べられてお仕舞いというような残酷な物語を、仮にも「文部省」という文字を冠する教科書の中に採録するというのは、いかにこの時代といえども異例といわざるをえなかった。その背後には、「ガラスの靴」と「赤ずきん」という二つの異なる終わり方をする物語を対置して、生徒にその結末の効果を確かめさせようという文学的な意図が働いていたと考えることができるのである。

チェンバーズの英語リーダーが日本の児童・生徒の文学教育に貢献した例は、これだけにとどまらない。明治三十年代にはいると、尋常小学校・高等小学校用の『国語読本』の中にもそこに掲載されたのと同じ文学作品が翻案・採録されていく。たとえば、明治三十三年に坪内逍遙が編纂した『国語読本』には、尋常小学校用の『巻六』に「手がさはると黄金」（ナサニエル・ホール著「ミダス王」）、高等小学校用『巻一』に「おしん物語」（ペロー「ガラスの靴」翻案）が掲載され、小学生徒の文学趣味の養成に貢献した。逍遙は、明治九年から十年にかけて東京開成学校・東京大学予備門に学んでおり、そこで使われていたチェンバ

ーズの英語リーダーについては、充分その内容を知りうる立場にあった。おそらく、逍遙は同英語リーダーの文学との深いつながりに早くから着目し、実際に自分が『国語読本』を編纂する際に、それを参考書目の一つに加えていったものと思われる。逍遙の『国語読本』は「文芸趣味の養成や情育、徳育の鼓吹」に力を注いでいる（『坪内博士の追憶記より』）点で、あるいは実際にそこからいくつかの素材を借りている点で、チェンバーズの英語リーダーに負うところが少なかつたといえるのである。

このように、チェンバーズの英語リーダーというのは、日本の読者がはじめてアンデルセンの作品と出会うきっかけを作ったばかりか、全国の学校に西洋童話を普及させたという点で、近代文学史上忘れがたい教科書であったということができるのである。われわれは、それが担った歴史的役割にもう少し大きな関心を寄せてみなければならぬだろう。

二 翻訳作品の出現

これまで、日本におけるアンデルセンの翻訳は明治二十一年二月に『女学雑誌』に掲載された「不思議の新衣裳」がもっとも古いとされてきた。この巖本善治の手になるといわれる「不思議の新衣裳」は、先に紹介した「児童書の会」の「アンデルセン作品目録」の筆頭に掲げられて以来、三十年近く経った今でもそのまま本邦最初の翻訳として各種年表などに紹介されている。明治期のアンデルセンの翻訳には、「不思議の新衣裳」より古い翻訳が存在するのだろうか、もし存在するとすれば、それは明治二十一年という年をどれほど遡る翻訳なのか。ここ数年来、初期の翻訳児童文学に関する調査を進める中で、わたしがもっとも関心を寄せてきたのはこの点であった。その根底には、日本における翻訳児童文学成立の原初を求め、それが出現するに至る社会的、文学的背景を解明してみたいという意識が働いていた。日本の読者にもっとも愛好されてきたアンデルセンやグリムなどの翻訳作品の出現経過をたどっていけば、必ずや初期の翻訳児童文学の特徴も明らかになってくるに違いない、そう考えて資料の収集・調査に当たってきた。さいわい、これまでの調査を通じて、『女学雑誌』掲載の「不思議の新衣裳」より古いアンデルセンの翻訳を四、五点発見することができた。それと同時に、アンデルセン以外にも、たとえばグリム童話の日本で最初の翻訳にめぐりあう等、予期せぬ発見もいくつかあった。それらの新たな発見をすべて総合して、現段階でわかる限りの新たな初期翻訳

児童文学の見取り図を作成してみようというのが本章の狙いである。

初期の翻訳児童文学における三つの流れ

まずは、新たに発見された資料の発行年に注目してみると、アンデルセンに関しては、明治十九年二月発行の「マッチ売りの少女」がもつとも古い。それ以前のものはこれまでのところ一点も見つかっていない。一方、グリムの翻訳についてもまったく同様のことがいえる。従来の研究では、グリムの翻訳でもつとも古いのは、明治二十年四月に刊行された菅了法（すがりようほう）の『西洋古事 神仙叢話』ということになっていたが、今回、共同研究者の榎原貴教氏と力をあわせて、明治期に刊行された新聞・雑誌を徹底的に調査した結果、それより古い資料を一点発見することができた。しかし、その翻訳も、明治十九年四月に発行されたもので、明治十八年以前に遡るものではなかった。一体どうして、アンデルセンやグリムの翻訳には、この明治十九年の壁を突き破る翻訳が見つからないのか。まずはこの疑問に対する解答を求めることから始めなければならぬ。

もちろん、その解答の一つとしてわたしたちの調査不足をあげることでも充分可能だと思いが、どうもそれだけではないらしい。というのも、アンデルセンやグリム兄弟の翻訳作品の出現経過には、双方をよく比べてみると、それぞれ別個にたどっていたのでは必ずしもはつきりしなかったある種の共通点のようなものが見いだされるのである。たとえば、グリム兄弟の翻訳作品の流れでいうと、最初に発表されたのは明治十九年四月の『ROMAJI ZASSHI』に掲載された「HITSUJIKAI NO WARABE（羊飼いの童）」という翻訳。次いで二十年四月発行の菅了法の『西洋古事 神仙叢話』。その次が「西洋昔噺第一号」として弘文社から出版された呉文聡（くれあやとし）の『八ツ山羊』。そしてそのあとに『女学雑誌』に掲載された「小娘と蝦蟇」ほか数編の翻訳が続く。これだけみたのでは、背後の状況はまったくみえてこないが、これにアンデルセンの翻訳経過を重ねてみると、意外な事実が浮かび上がってくる。すなわち、アンデルセンの初期の翻訳は、英語リーダーの直訳本に掲載されたものを除くと、まず最初が、明治十九年十一月の『ROMAJI ZASSHI』に掲載された「ONO ATARASHIKI ISHO（王の新しい衣裳）」という翻訳。その次が、明治二十年に版權登録がなされた鈴木甲次郎訳『馬かへのおきな』。これはグリムの『八ツ山羊』と同じ弘文社から「西洋昔噺第二号」として出版される予定になっていたものだが、版權登録だけで出版はされなかった。そしてその次に、『女学雑誌』の「不思議の新衣裳」が発表され、そのあとに、有名な河野政喜訳の『諷世奇談 王様の新衣裳』が続く。

つまり、グリムとアンデルセンの翻訳は、掲載された雑誌も同じならば、単行書のシリーズ名も同じ、両者はほとんど一對の児童文学作品として世に送られたといってもいいほど、よく似た発表経過をたどっている。理解しやすいようにそれをグループ別にまとめてみると、まず最初に発表されるのが『ROMAII ZASSHI』で、その次が「西洋昔噺」というシリーズ名を伴う単行書（アンデルセンの作品は版權登録のみ）。それに続いて『女学雑誌』に掲載された翻訳。そしてその間に「奇話」「奇談」の翻訳文学の系列に連なる大人のための翻訳集がそれぞれ一篇ずつ挟まる、というかたちである。

注目すべきはこれらの作品が単に一つの流れに属するものではなくて、いくつかの翻訳児童文学を生み出す力が同時に作用していたということである。上に示した四つのグループをよく観察すると、そこには大きく分けて三つの流れが存在する。すなわち、第一に、『ROMAII ZASSHI』と『女学雑誌』に掲載された翻訳作品の流れ（これが一つの流れに統合できることはのちに説明する）。二番目が、「西洋昔噺」というシリーズ名を伴う単行書。そして、三番目が、「奇話」「奇談」の系列に連なる、主として大人のための翻訳作品の流れである。このように、明治十九年以降、いくつかの翻訳児童文学の流れが同時に起こってくるということは、それが起こるに必要な背後の文学的、社会的環境がこの頃になってようやく整備されはじめたということを物語るもので、裏を返せば、十八年以前には、そうした翻訳児童文学を生み出すのに必要な条件が充分にととのっていないと考えることができる。

とりわけ重要なのは、それらの翻訳作品が、先に紹介した西洋の「奇話」「奇談」を求める社会的傾向よりは、むしろ児童文学の本来の目的である、子どもたちを育成・教化するという大前提の中から生まれていったということである。この点が、同じ西洋において児童に親しまれていた作品の翻訳とはいっても、それ以前に紹介された『アラビアン・ナイト』や『ロビンソン・クルーソー』の翻訳などとは大きく性質を異にする点であった。たとえば、上に示した三つの流れの中で、最後のものを除く二つが、最終的には子どもの読者を想定した翻訳作品であり、グリムとアンデルセンの作品は、それが日本に根を下ろしはじめる当初から、子どもたちの豊かな情操を育む文学作品として紹介されていったことに注目する必要がある。そのような子どもを意識した翻訳文学が生まれてくるのがちょうど、明治十九年という年であり、そのことが明治十八年以前にアンデルセンやグリムの翻訳がないことと大いに関係している。言い換えると、それが冒頭に提示した疑問に対する真の解答であったということになる。

「西洋昔噺」編纂の背景

このように、初期のアンデルセンやグリムの翻訳は、日本の児童文学史上大変重要な意味をもつものであり、それが生まれる背景についてはさらに詳しい検証を試みる必要があるだろう。そこで再び先ほどの三つの流れに話を戻して、具体的内容を考察してみると、まず三つの系統の翻訳文学のうち、主に子どもを読者の対象としているのは、最初の雑誌掲載の翻訳と二番目の「西洋昔噺」のシリーズ名を伴う単行書である。それに対し、最後のものは、「奇話」「奇談」の翻訳文学の流れに連なる、主として大人を対象とした翻訳作品であった。それら大人のためのグリムやアンデルセンの翻訳が生まれる背景については、序論の中で詳しく説明したのでそちらを確認してもらうとして、ここで検討する必要があるのは、子どもを読者の対象とする最初の二つの流れである。まずこれらの二つの流れのうち、どちらが早く世に現れたかという点について確認しておく、翻訳作品というかたちで現れてくるのは、雑誌掲載の翻訳のほうが「西洋昔噺」のシリーズ名を伴う単行書よりも一年数ヶ月早かった。しかし、その流れを生み出した要因ということになると、「西洋昔噺」は明治十八年に発行された「日本昔噺」の流れに連なる翻訳作品と見なすことができるので、雑誌掲載の翻訳より数ヶ月早かったということになる。

そこで、まずは「西洋昔噺第一号」の文字を伴う『八ツ山羊』という作品の検討からはじめると、それが刊行されたのは明治二十年九月。翻訳者は慶応義塾や大学南校に学び、東京統計協会の創設者として知られる呉文聡であった。本の題名からも想像されるとおり、グリムの「狼と七匹の子やぎ」を翻訳したもので、訳文は子どもにも充分理解可能な平易明快な文章となっている。参考までに冒頭の一文を引用しておくと、こんな調子のものであった。

《むかし▼八ツ子をもちし牝山羊ありけり。ある日市街に行かんとして子どもらにむかひ、るすのうちはかたく戸をとちて、たれがきたるともかならずあくることなかれ。皆々おとなしくすせよ。みやげには、旨き物をたくさんかふてきて、あたへんとねんごろにいひおみていでゆきぬ》

初期のグリム童話の翻訳の実態に詳しい前出の榊原貴教氏によると、明治期のグリム童話の翻訳には大きく分けて三つの流れが存在するという。一つは菅了法の『西洋古事 神仙叢話』に代表される、「西欧世界を理解する系譜として現れた」もの。またもう

一つは『女学雑誌』に紹介された翻訳のように、「母親の子どもに対するしつけの物語」として受容されたもの。そしてもう一つは、「子どもに直接語りかける物語」として『小国民』や『少年世界』などの児童向け雑誌に「意識・翻案」されたものである。『明治期グリム童話翻訳集成』（アイアール・デー・企画、一九九九年）掲載の「はじめに」参照）。呉の『八ツ山羊』が、この三つの系列の中で最後の「子どもに直接語りかける物語」の流れに属するものであったことは、ここに引用した文章を見れば一目瞭然である。『八ツ山羊』は、グリムの単行書としては、^{西洋}古事 神仙叢話』に次ぐ史上二番目のものではあったが、「子どもに直接語りかける」翻訳書という点に関しては、グリムに限らずすべての西洋児童文学の翻訳作品の中でもっとも古いものの一つとして注目される。

この翻訳書には、実は、訳文と同時にもう一つわれわれが注目しなければならない重要な点がある。それは、平易明快な文章をさらに理解しやすいものにするために各頁に挿入されている彩色の挿し絵である。挿し絵というよりは、全面に絵が配されてそこに文字がそえられている絵本といった方がいかもしれない。その絵には、狼がたたいている家の扉の部分と、山羊の子を丸飲みにして満腹の体で眠っている狼の腹の部分の二カ所に仕掛けが施されており、いずれもその部分を開くと中にいる子山羊たちが姿をあらわすというしくみになっている。何か西洋の「Toy Book（おもちゃ絵本）」にでもヒントをえたものと思われるが、『明治の児童文学 翻訳編 グリム集』（五月書房）の「あとがき」参照）、それにしてもそのようなユニークな特色をもつ西洋童話の翻訳が明治二十年という段階で世に送られていった理由は一体どこにあるのか。

そのもっとも大きな要因と考えられるのは、これを刊行した弘文社という出版社である。同社を率いる長谷川武次郎という人物は、長谷川チリメン本として知られる「日本昔噺」シリーズを手がけた人物として名高い。それらの本は、しわをよせて絹織物の縮緬のように仕あげた和紙に彩色の版画と欧文のストーリーを付した大変美しい書物で、主として外国人の土産用に作られたものであった。英語版、ドイツ語版、フランス語版などがあり、そのうち英語版だけでも明治十八年から十九年の間に合計二十篇が刊行されている。私蔵の英語版『MOMOTARO』の刊記をみると、日本語で「日本昔噺第一号／桃太郎／明治十八年八月十七日版權免許同年九月出版／発行者長谷川武次郎」とあり、これを、呉の『八ツ山羊』の奥付の表記と比べてみると、「西洋昔噺第一号／八ツ山羊／明治二十年七月十五日版權免許同九月出版／出版人長谷川武次郎」というようにほとんど同一の文字が繰り返されている。ただ違うのは、「日本」と「西洋」が入れ替わっていることぐらいである。ということとは、つまり、「西洋昔

「昔」は、好評を博した「日本昔噺」シリーズの姉妹編として世に問われたものであったと判るのである。

そのような事情もあって、両者には共通する点も少なくなかった。たとえば、上に述べた「日本昔噺」が和紙に多色刷りの美装本であったのに対して、『八ツ山羊』のほうは西洋の「Toy Book」を模した仕掛け絵本というように、大変凝った装丁や趣向もその一つである。しかし書物そのものには共通する点も少なくなかったが、それを迎え入れる読者の反応は両者対照的といってもいいほど大きく異なっていた。その違いは双方の発行篇数に端的に現れている。英訳版の「日本昔噺」が、わずか一年ほどの間に第二十号まで発行されたのに対し、「西洋昔噺」は第一号が出ただけで打ち切りとなった。第二号にアンデルセンの『馬かへのおきな』という作品が予定され、「鈴木甲次郎訳」と翻訳者も決まって版權登録まで済ませていたが、ついに出版されることはなかった。アンデルセンのファンにとっては返す返すも惜しまれるところだが、それが明治二十年の時点における西洋童話に対する人々の評価の現実だから仕方ない。

なぜ「西洋昔噺」は日本の読者に広く受け入れられるところまで至らなかったのか。その原因は、当時の児童文学というものに対する読者の関心の低さにあった。「日本昔噺」を読んだのは主として英、米、独、仏等の西洋人であったのに対し、逆に「西洋昔噺」の読者として予定されていたのは、日本人の、しかも主に子どもたちであった。この読み手の側の質の差が、そのまま発行篇数の多寡となって現れたと見ていいだろう。一方は幼少の頃からグリムやアンデルセン、マザーグースといった児童文学作品に囲まれて育ってきた人々で、日本の美しい彩色木版画に彩られた昔話に関心を寄せるだけの素地が身に具わっていた。一方、日本にも古くから子どもたちのための童話や昔話はあるにはあったが、外国の児童文学作品に関心が及ぶほど、児童文学に対する理解は深まっていなかった。読者の心にそのような関心が芽生えてくるのは明治も二十年代の半ばになってからのことであり、「西洋昔噺」は、ちょうど彼らの意識がそこに向かいはじめる出発点に位置する書物と考えられるものである。換言すれば、「西洋昔噺」は、さらに限定すれば、そこに掲載された、あるいは掲載される予定であった、グリムやアンデルセンの作品は近代児童文学の地平を切り開くパイオニア的役割を担った作品であったということになる。日本に真の児童文学が根ざすには、この「西洋昔噺」の試みを第一歩として、『小国民』（明治二十二年七月創刊）や『少年世界』（同二十八年一月創刊）など次々に発刊される児童向け雑誌に西洋童話の翻訳が掲げられ、それを通して人々の意識が啓発されていくのをまたなければならなかった。「西洋昔噺」以降の二、三十年間というのは、日本の読者が、そうした翻訳・翻案作品の助けを借りて、欧米児童文学の本質を理解し、

やがて独自の児童文学作品を花開かせていくまでの準備期間と位置づけることができるのである。

『ROMAJI ZASSHI』の翻訳

わたしはいま、グリムやアンデルセンの作品が掲載された雑誌として『小国民』と『少年世界』の名前をあげたが、それは二人の作品を日本の読書界に定着させる上で大きな役割を果たした雑誌として例に引いたのであって、彼らの作品を初めて掲載した雑誌という意味ではあげたのではない。先にも述べたように、日本の読者に初めて彼らの作品を紹介する榮譽を担ったのは『ROMAJI ZASSHI』と『女学雑誌』である。これら二つの雑誌にグリムやアンデルセンの作品が掲載されるのは明治十九年から二十一年のことであり、時期としては「西洋昔噺」の刊行と重なる。そこに二人の作品が掲載されたのを契機として、本邦の読書界に西洋児童文学の翻訳が根を下ろしていく様子を以下に詳しくたどってみることにする。

まず、はじめに『ROMAJI ZASSHI』であるが、それが創刊されたのは明治十八年六月のことで、『女学雑誌』の創刊より一月ほど早い。その十一月（明治十九年四月）にグリムの「HITSUJIKAI NO WARABE（羊飼いの童 [KHM 152]）」という翻訳が掲載されたのが、現在わたしの確認しているグリム童話のもっとも早い翻訳例である。注目すべきは、この「羊飼いの童」が載ったのが、同誌に常設されていた「KODOMO NO TAME（子どものため）」という欄であったということである。明らかに、これは読者の対象として子どもを想定した翻訳であり、グリム童話の翻訳と子どもの読者を結びつける日本で最初の翻訳として特筆に値する。一方、同じ雑誌の十八号（明治十九年十一月）には、アンデルセンの「ONO ATARASHIKI ISHO（王の新しき衣裳）」が掲載される。これも雑誌に掲載されたアンデルセンの作品としては、わたしの知る限りもっとも早いものである。こちらは「子どものため」という欄ではなくて「ZATUROKU（雑録）」欄に掲載されたものだが、とくに成人の読者を想定した翻訳というわけではない。先に掲げたグリムの翻訳と比較できるように、双方の冒頭部分を引用してみると、次のようなものであった。

【「王の新しき衣裳」】

《今は昔、ある国に一人の王様ありけり。ことのほかに御召し物の美しきを好みたまう御癖ありて、つねづね御衣の善し悪しにのみ御心を留めたまい、終日御衣裳部屋に入りたまいて、あれのこれのと着飾り見比べたもうことも多かりき。》

【「羊飼いの童」】

《今は昔、一人の童ありけるが、生まれつき賢くして、いかなる問いを出すもこれに答えずということなし。かかりければ、世の評判いと高く、国王の御耳に達しけり。王は事のあまり大きやかなりければ、真とも思さざりしが、いでこれを試みんとてこの童を呼ばしめたり。》

双方の文章を読み比べて、どこか違っている点が見いだせるだろうか。もちろん原文はすべてローマ字で綴られているものだから、漢字や送りがなのことは度外視して考えなければならない。少なくとも文章の難易という点では、「雑録」欄に掲載された「王の新しき衣裳」も、「子どものため」という欄に載った「羊飼いの童」も、まったく違いはみられない。強いていえば、物語全体の長さが、前者は後者の三倍強に達するという点ぐらいいではないかと思う。双方、著名な西洋童話を原作としたものであり、文章の上でも違いがないとすれば、「王の新しき衣裳」も、「羊飼いの童」と同様、子どもが読んでも一向に不都合のない翻訳であったということになる。

このように、『ROMAJI ZASSHI』は、そこにグリムやアンデルセンの童話を掲げている点において、そしてその目的をはっきりと「子どものため」と特定している点において、日本の児童文学史上画期的な雑誌であったということが出来る。多少大げさなものかを許してもらえば、日本の近代児童文学は『ROMAJI ZASSHI』にはじまったといっても過言ではないのである。同誌がそのような歴史上の大役を担うことができた原因は、一体どういうところにあつたのか。それは、この雑誌の発刊の目的と深く関係している。もともと『ROMAJI ZASSHI』というのは、漢字の読み書きを覚えるのに費やす多大な労力を省いて、すぐに西洋の新知識を吸収できるようにという趣旨のもとに進められた、ローマ字使用運動の一環として発行された雑誌である。その運動は、明治十六年頃から盛んになってきた大槻文彦らの「かなの会」（国文を平仮名で綴ろうという運動）に対抗するものとして、明治十八年一月に外山正一や矢田部良吉、神田乃武ら西洋の言語、文化に通じる人々たちによって組織された。「羅馬字会」というのがその正式な名称であつたが、「かなの会」との違いを示すために、ローマ字を学べば「西洋の語」を学ぶことも容易になる、あるいは「文明開化の新鮮なる空気を吸ふことも大いに易しく」という点を力説した（『羅馬字会趣意書』『羅馬字会総会

演説筆記』(明治十九年三月)。そうした西洋の文化や文明を吸収する手段としてのローマ字学習を助長するために発行されたのが『ROMAJI ZASSHI』であったというわけである。

「羅馬字会」が、会員の対象として狙っていたのは、ローマ字の効用を真に理解する大人たちであるとともに、これから西洋の諸学を修めようとする学生たちであった。それは、会費として通常の大人が一年に一円を納めたのに対し、「諸学校ノ学生生徒」は四十銭と割引されていたところをみてわかる(「羅馬字会規則」)。「ROMAJI ZASSHI」に掲載されたアンデルセンやグリムの翻訳は、おそらくそうした「諸学校ノ学生生徒」に照準を当てて翻訳されたものと思われる。あるいは、わざわざ「子どものため」という欄を設けているところから判断すると、それよりもっと年少の小学生徒をも視野に入れていた可能性もある。もちろん、大人がそれを購入し子どもに与えるというわけだが、われわれの学習体験に照らしてみても、小学校の三、四年生になれば、上記のアンデルセンやグリムのローマ字訳を読みこなすぐらいの学力は十分に備わっていたと思われるのである。

ともあれ、『ROMAJI ZASSHI』というのは、上に述べたように、漢字を覚える労力を省きすぐに西洋の新知識を吸収するという目的を遂行するために発行された雑誌であり、読者の対象には、当然、小中学校の生徒も含まれていた。一方、その雑誌を支える幹事や寄稿者には、日本の近代教育の礎を築いたG・F・フルベッキやB・H・チェンバレンをはじめ、外山正一や矢田部良吉、井上円了、田口卯吉など東京帝国大学と関係の深い学者や西洋の事情通が顔をそろえていた。彼らにとって、手もとの文書や、当時一般に流布していた教科書などを渉猟すれば、『ROMAJI ZASSHI』に掲載されているような西洋童話の原文(ないしは英訳)を見つけたのはさほどむずかしいことではなかったろう。『ROMAJI ZASSHI』が日本で最初の西洋児童文学の紹介の場となったというのも、当然なるべくしてなったと考えることができるのである。

ついでに上に引いたグリムとアンデルセンの翻訳者について一言触れておくと、それぞれの訳文には「KATAYAMA KIN-ICHIRO (かたやま きんいちろう)」「YASUOKA SHUNJIRO (やすおか しゅんじろう)」という名前がローマ字でさえられており、二人がその翻訳を手がけた人物であったことはわかるのだが、残念ながら彼らの経歴や正式の漢字名等については詳らかにしない(『ROMAJI ZASSHI』には、明治二十年六月発行の二十五号にさびにまじり一篇「MAME NO HANASHI (豆の話)」というグリム童話の翻訳が載るが、それを訳した「MURA CHUSUKE (むらちゅうすけ)」についても同様である)。ひょっとすると外山正一や矢田部良吉の周辺にいた人物の可能性もあると思って、当時の東京帝国大学や高等中学校の名簿などを調べてみたが、

そうした名前は見あたらなかった。あるいはまったくの投稿記事であった可能性も考えられるが、いずれにしても彼らの経歴の確認については今後の調査にまつほかはない。

『女学雑誌』の翻訳

『ROMAJI ZASSHI』のことは、これくらいにして、話を『女学雑誌』に掲載された翻訳のほうに移そう。『女学雑誌』におけるアンデルセンとグリムの作品の掲載順序は、『ROMAJI ZASSHI』とは逆に、まずアンデルセンの翻訳が最初に掲げられ、次いでグリムの翻訳数篇が載るといふ順になっている。具体的な作品名と掲載年月を掲げると、最初に発表されたのはアンデルセンの「不思議の新衣裳」（明治二十一年三月）で、そのあとすぐに「小娘と蝦蟇」（同年四月）、「忠実なる家来」（同四月）、「賢い仕立屋」（同五月）、「馬鹿正直」（同六月）、「心の変わり易き人」（同八月）とグリムの童話が五篇続いている。ここでもやはりアンデルセンとグリムの翻訳は対になって翻訳されていることをまず確認しておく必要がある。

では、それらの作品は一体どんな読者を対象に翻訳されたものであったのか。『女学雑誌』という雑誌の性質からみて、それが成人女性のための翻訳であったことは確かだろう（とくに同誌が十代後半から二十代にかけての若い女性にターゲットを置いていたことは各所に掲げられた「求婚広告（男性が結婚相手を求める広告）」や『婚姻論』といった書物の宣伝内容からわかる）。しかし成人女性を対象とした翻訳ではあったが、同時に子どもの読者を視野に入れた翻訳であったということも、また紛れのない事実であった。そのことは、アンデルセンやグリムの翻訳が掲げられているのが、「小供のはなし」というコーナーであったのをもみても推測できる。同コーナーに掲載された作品は、のちに一冊の本にまとめられ、その名も『子どもの談』^{はなし}という題名で女学雑誌社から刊行されている。わたしはその本を目にしたことはないが、明治二十四年七月発行の同誌の広告に、「『子どもの談』／紙数八十葉／定価二十銭」と記され、その「第十五、不思議の新衣裳」「第十六、小娘とガマ」というように各話の明細が載っているところから、刊行されているのは間違いない。注意すべきはその広告文で、そこには、はっきり「右は子供の為になる好きお話にて、母親が言い聞かすに結構な材料なり」と目的が明記されている。つまり、今日いうところの「読み聞かせ」用児童図書のようなものを想定して作られた書物であったということになる。換言すると、そこに載っているアンデルセンやグリムの翻訳は、前出の榊原貴教氏がいうように、「母親の子どもに対するしつけ」を念頭においた翻訳であったと考えられるのである。『明

治期グリム童話集成』(アイアールデー企画、一九九九年)の「はしがき」(参照)。

先ほどの『ROMAJI ZASSHI』の翻訳が、ローマ字の学習を志す生徒たちが直接手にとって読む翻訳であったのに対し、こちらは母親を通して間接的に子どもたちの耳に伝えられる翻訳であったというわけである。その違いがどのようなかたちで訳文の上に現れてくるのか、そのことを確認するために「不思議の新衣裳」の冒頭部分を以下に引用してみることにしよう。

《或る国の天子さまは大層美しくしひ衣物がお好きで、毎日▼化粧部屋に入つて、半日は衣物を着換へたり何かして暮されたと申すことで、夫故華美立派なる衣服としては山の如く在りましたが、まだ▼美しひものとあらば、何れ程の金を出してもお買上に成るとの評判高くなりました。》

『ROMAJI ZASSHI』の「王の新しき衣裳」が、「今は昔、ある国に一人の王様ありけり」というように文語主体の訳文であったのに対し、こちらは、従来の物語の定型を脱した、かなりの自由訳になっている。この書き出しの部分と、最後の「ですから……お前方は何でも正直にし、そして正直な事を言ふには少しも恐るゝことなくキツパリと之を言ひ、また断じて行はなければなりませんよ」という文章などは、当時の児童文学としてはめずらしい言文一致の文章とみることができる。母親が子どもたちに「言い聞かす」のに「結構な材料」を提供するという意識が、訳者をして自ずとそうした方向に向かわせていったものと思われる。

忘れてならないのは、これが明治二十一年という段階で発表された西洋童話の翻訳であったということである。その時点における子ども読みの物といえ、お伽噺や「赤本」(偉人・傑士の伝記や武勇伝等を題材とした子ども向けの草双紙)が中心で、真の意味での近代児童文学の時代はいまだ到来していなかった。その夜明けを告げる鶏鳴の第一声となったのは、よく言われるように巖谷小波の『こがね丸』(明治二十四年一月)という作品である。これは、当時の有力書店・博文館が発行した「少年文学」という児童向け図書シリーズの第一編として世に送られたもので、小波門下の木村小舟の言を借りれば、「『こがね丸』の一冊は、実に連山人をして、少年文学界の権威たらしめたばかりでなく、前人未踏の好文学として、『少年文学』の地位を確立せしめる上に、至大の効果を」もたらすものであった(『少年文学史』明治篇)。しかし、その「前人未踏」の『こがね丸』にしたところで、今日

われわれが手にする児童文学書とは似ても似つかない古さを随所にとどめていた。たとえば、勸善懲惡的な筋の設定もその一つ。「金眸大王」という猛虎のために父親を殺害された狐の「こがね丸」が父のかたきをとって忠孝の誉れを手にするという物語の筋だては、「前人未踏の好文学」というにはおおよそ似つかわしくない前時代的な考えを引きずっている。文体もまたしかりで、「むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり」ではじまる滝沢馬琴流の七五調が、果たしてどこまで子ども本位の文章であったか、疑問とせざるをえない。

「不思議の新衣裳」は、この『こがね丸』を遡ること二年十カ月前に発表された作品であった。『こがね丸』と比べて違っているのは、物語に込められた思想もさることながら、それを伝える文章が、「或る国の天子さまは大層美しくしひ衣物（きもの）がお好きで……」というように、それまでになかった斬新な語り口の文章になっていることである。そのような新しい話法の児童文学が生み出される原因は一体どういふところにあつたのかというと、それは、本篇が西洋の文学作品の翻訳であつたことと無関係ではない。西洋の文学作品の翻訳であつたがゆえに、自由な発想に立つてその訳文を創出することができたのである。しかし、それだけでは、旧文学の伝統に支配された明治の作家たちの意識を変えるところまでは至らなかつたろう。『ROMAJI ZASSHI』の訳者も、巖谷小波も、物語となれば「今は昔、ある国に一人の王様ありけり」の常套文句ではじめずにはいられないほど、彼らの脳裏は旧来のしきたりに強く支配されていたのである。そうした旧文学の呪縛を断ち切るもつとも大きな要因として働いたのが、母親が子どもに「言い聞か」せるといふ目的であつた。一つは、西洋の優れた児童文学の翻訳であつたこと、そしてもう一つは、子どもに「言い聞か」せるといふ目的があつたこと、この二つの要素が結びついてはじめて、上に引いたような時流を抜く優れた訳文の創出につながつたと考えることができるのである。いってみれば、それは『女学雑誌』にしてはじめてなしうる技術革新であつた。明治二十一年という段階で、西洋児童文学を子どもに「言い聞か」せる、ないしは直接語りかけるということを発想しうる雑誌は、『女学雑誌』を措いて、ほかにありえなかつたからである。

そうした画期的な視点を内包していた『女学雑誌』からは、当然のことながら、その後も日本の児童文学史上忘れることのできない名訳が生まれていく。中でも注目されるのは、明治を代表する女流翻訳家・若松賤子の訳文である。「セドリツクには、誰も云ふて聞かせる人が有りませんかつたから、何も知らないであつたのです。おとつさんは、イギリス人だつたと云ふこと丈は、おつかさんに聞いて、知つていました……」。有名な「小公子」（明治二十三年八月から二十五年一月にかけて『女学雑誌』に掲載）

の書き出しの一文であるが、この若松賤子特有の口語文もまた、西洋文学の翻訳と子どもに話して聞かせるという要素が結合して、はじめて可能な文体であったといえるだろう。「不思議の新衣裳」といい、「小公子」といい、日本の文学史上に燦然と輝く翻訳作品を生み出す母胎となった『女学雑誌』という雑誌に、われわれはいくら注意を払っても払いすぎることはないのである。

突き止められた原典

もちろん、われわれが注意を払うべきは雑誌の自身に対してだけではない。それを編集・発行した巖本善治という人物に対しても、同様な関心を寄せてみる必要がある。署名こそ付されていないが「小供のはなし」に掲載された文章は、だいたい編集人の巖本の手になるものといわれている（巖本が書いた記事には、「社説」を含めてほとんどのものに署名がない）。巖本は、文久三（一八六三）年の兵庫県の生まれで、明治九（一八七六）年に上京したのち、学農社の津田仙の影響でキリスト教に入信する。その後、キリスト者の立場から、女性の啓蒙活動に従事する一方、明治二十（一八八七）年には明治女学校の教頭に就任し、女子教育にも力を尽す。その後、明治を代表する女流作家・若松賤子と結婚（明治二十二年）、二人で力を合わせて、日本の女性の地位の向上に、また文学の改良に努めていった。そんな彼が発行する『女学雑誌』に、女性の自立を呼びかける記事や児童の立場に立った文学作品が満載されるのは、しごく当然のことであったといえるだろう。

外国文学についても、巖本は早くからそれと取り組まなければならない立場にあった。彼が教鞭をとっていた明治女学校では、ワシントン・アーヴィングの『スケッチ・ブック』やオリヴァー・ゴルドスミスの『ウェークフィールドの牧師』など、英米の文学作品が盛んに講じられており（柳田泉『西洋文学の移入』参照）、アンデルセンやグリムの作品に関しても、英語リーダーなどを通して接触する機会は充分あったと考えられる。そのことに関連して、わたしは一つ大変興味深い事実を発見した。それは、「不思議の新衣裳」の翻訳が、デンマーク語の原文によるものではなくて、『ナショナル読本』（正式には『ニュー・ナショナル・リーダーズ』。本稿では簡単に『ナショナル読本』と表記する）に掲載された英訳に基づく翻訳であったということである。『ナショナル読本』は『女学雑誌』以外にも、いくつかの雑誌や書物に物語の素材を提供するなど、明治の西洋文学受容史上、なくてはならない重要な影響を及ぼした。初期のアンデルセンの翻訳の実態を知る上でも大変貴重な資料なので、以下に文章の一部を引用し、それを明治二十一年以前に発表された三種類の「王様の新しい衣裳」の翻訳と比較・照合してみることとする。引用箇所は、作

品の後半に至って、いよいよ新しい衣裳が完成し王様が実際にそれを試着してみるという場面である。

【『ナショナル第五読本』英訳】

The emperor entered with his chief attendants, and proceeded to put on his new robes, after removing all his upper garments. The two rogues, lifting up one arm as if they were holding something, said, "See! here is the waistcoat! here is the coat! here is the cloak!" and so on.

【『ROMAJI ZASSHI』掲載「王の新しき衣裳」】

《されば王は御上着おんを脱ぎ捨てたまひ、仕立て上がりの御衣裳を召したまわんとしたまえば、織物師らは心得て、さも召し物を捧げしごとき手つきを示し奉り、「こはチョッキにて候そうろうなり。御覽ぜよ！これは上着そうろうにて候そうろうぞや。こは御おんひきまききに候そうろうなり。』》

【『女学雑誌』掲載「不思議の新衣裳」】

《天皇下着まつたまを着けて待玉まつたまふに、織手は恭うやうやく新衣裳と云へるものを捧さかげ来り、之が下したばきにて候、之が上着うしろにて候、之が長上着ながにて候など、一々に渡し奉りて玉体に装はせ申す》

【在一居士訳『諷世奇談』王様の新衣裳】

《王様は即まづち真裸まはだかになられた、而そして欺騙者等かたりどもが引ひくやら推ひくすやらして王様に衣裳をつける真似をして、最後に何か後うしろへ着つける様子を為た、是は長く垂れた後の裾であつた》

【参考 大畑末吉訳「皇帝の新しい着物」(岩波文庫)】

《皇帝はすっかり着物をおぬぎになりました。すると、いかさま師どもは、できあがつたつもりつもりの新しい着物を、一つ一つ

お着せするようなふりをしました。それから、腰のまわりに手をまわして、何かをむすぶような手つきをしました。それは、
裳裾のつもりだったのです。」

ここに引用した『ナショナル第五読本』の英訳には、アンデルセンの原文にはない勝手な改ざんがみられる。原文は、最後に参考訳として掲げた大畑末吉氏の訳をみてもわかるとおり、織り手の「いかさま師ども」が皇帝に「新しい着物を、一つ一つお着せするようなふりをしました」となっているのに対して、『ナショナル第五読本』の英訳は、「二人のいかさま師が、「何かを持つかのように腕を上げて言うには、『ご覧ください、これがチョッキ(waistcoat)です、これが上着(coat)です、これが外套(cloak)です』と、手渡す衣裳の明細が一つ一つ明かされている。わたしがわざわざ上記の箇所を選んで引用した理由は、そこにでてる「waistcoat」「coat」「cloak」という特定の語が、邦語訳の出典を突き止める上で、重要な意味をもつてくると考えたためである。

そこです、『ROMAJI ZASSHI』と『女学雑誌』に掲載された日本語訳と比べてみると、第一に、『ROMAJI ZASSHI』の該当箇所は、「こはチョッキにて候なり。御覽ぜよ！これは上着にて候ぞや。こは御ひきまきに候なり」というように、それが『ナショナル第五読本』の忠実な翻訳であったことがわかるのである。日本語訳だけみたのでは、最後の「ひきまき」が何を意味するのかわかり理解できなかったが、英文と照合することにより、それが「cloak」に当てられた訳語であることが判然としたという次第である。それに対して『女学雑誌』の翻訳はどうかというと、同じようにそれは『ナショナル第五読本』を底本とするものではあるが、こちらは『ROMAJI ZASSHI』の翻訳とは違ってかなりの意識になっている。二人のいかさま師が「何かを持つかのように腕を上げて言うには」云々とあるところを、簡単に「織手は恭うやく、新衣裳と云へるものを捧げ来り」とまとめている。しかし、二人が衣裳を差し出す箇所については、「之が下ばきにて候、之が上着にて候、之が長上着にて候」と英訳通りの逐語訳になっている。こちらが、「waistcoat」を「下ばき」、「cloak」を「長上着」と訳すなど、この時代ならではの苦心の跡が見てとれる。

ここに引用した箇所以外にも、アンデルセンの原文と異なる箇所が、『ナショナル第五読本』の英文と一致する箇所が数多くみられるところから、これらの翻訳が『ナショナル第五読本』の英訳を基にしていることはまず間違いないものと思われる。『ナシ

『ヨナル第五読本』とは別に、同じ英訳を掲載する書物が出回っていたという可能性も考えられなくはないが、『女学雑誌』の「小供のはなし」欄には、「不思議の新衣裳」以外にも「尤も尊き所行」（明治二十一年三月、四月）というような『ナショナル読本』に掲載されている話載っていることから、これも同リーダーに依拠した翻訳と受けとめるのが理にかなっているように思われる。『ナショナル第五読本』の版權登録は一八八四（明治十七）年で、「王様の新しい衣裳」の翻訳が出まわりはじめるのは明治十九年以降のことであったから、その点からみても矛盾はないのである。

『ROMAJI ZASSHI』『女学雑誌』の翻訳の出典はそれでいいとして、もう一つここに訳例を掲げた在一居士の『諷世奇談 王様の新衣裳』はどうだろう。それは同じ英訳に拠るものなのか、それともまた違った原典を底本とするものなのか。その点を確認するために、例のいかさま師が王に衣裳を差し出す箇所をみると、二人は「引やら推すやらして王様に衣裳をつける真似をして、最後に何か後へ着る様子を為た」というように、明らかに『ナショナル第五読本』の英訳とは異なっている。そこで、改めて同書の内容を確認してみると、まず表紙に「Les Xabis Neufs Du Grand-duc Par Andersen」という仏文の表題が掲げられ、巻末の跋文に「右はデンマルク人アンデルセンの奇談集の一話なるが、未だ原書を見ざるによりて、姑らく仏蘭士人ソルデ氏の訳本より翻訳したり」という断り書きがそえられている。

『ナショナル第五読本』の英訳とは違って、その仏語訳は原文をかなり忠実に再現した翻訳であったことが同書の内容からうかがえるのだが、それにしてもこれが発表された明治二十一年十二月という段階で、フランス語の訳文をかくも流ちょうな言文一致体の日本語に移し換えることのできた本書の訳者とは一体何者であったのか。そこでもう一度本の刊記を確認してみると、表紙には「アンデルセン原作／在一居士翻訳」という翻訳者の号が記され、奥付に「翻訳者 河野政喜」と実名が明記されている。つまり、この本は在一居士こと河野政喜の手になるものであったということがわかるのである。従来われわれはこの記述をそのまま信じて、日本で最初のアンデルセンの翻訳書は河野政喜によるものであると受けとめてきた。ところが最近になって、この在一居士＝河野政喜という見方を根底から覆すような有力な資料が発見された。実は、この翻訳は明治三十六年九月に『言文一致』という雑誌に再録されて、再び世の読書子の前に供されているのである（表題は「諷世奇談」。注目すべきはその際の訳者の名前で、そこには在一居士という号でも、河野政喜という名前でもない、「高橋五郎訳」という第三の翻訳者名が記されているのである。高橋五郎といえ、人も知る語学・文学の大家であった。本名を高橋吾良といい、「五郎」、「在一居士」の筆名

をもつ。「漢学・国学を修め、のち上京して緒方惟考に洋学を学」び、「ブラウン牧師から英・仏・独語を習い、聖書の邦訳事業に加わ」つたと、三省堂の『コンサイス日本人名辞典』にも記されている。国民英学会で彼のバイロンの講義を聞いた蒲原有明は、「何しろ高橋といふ人は漢学が非常に出来た。その人が豊富な語彙を自由に駆使して、バイロンの名詩を様々に訳してみせる。これが実に役に立」つた（矢野峰人『蒲原有明研究』参照）、と感想を述べている。漢文に、英語・フランス語・ドイツ語に、そしてなにより和漢洋の文学に、彼は通曉していた。

『言文一致』に再録された翻訳が高橋自身の発表したものなのか、それとも在一居士を高橋五郎の号と知っていた者が本人に無断で載せたのか定かではないが、とにかく本邦初のアンデルセンの単行書と明治の洋学界を代表する高橋五郎とをむすびつける興味深い資料であることは間違いない。その翻訳が仏文からの重訳であったこと、言文一致のこなれた訳文であったこと、さらには跋文に掲げられている批評文の水準の高さ等々を考慮に入れるならば、『諷世奇談 王様の新衣裳』が高橋五郎の翻訳であったという可能性は極めて高いように思われる。

このように明治のアンデルセンの紹介は、一つには『ナショナル読本』に掲載された英訳を日本語に移すというかたちで、また一つには欧米に広く出回っていた翻訳本を重訳するというかたちではじまった。それぞれの翻訳者は、手にする原典こそ違っていたが、そこに込められた原著者の思想をしつかり胸に受けとめて、日本の文化や思想風土の改革につなげていったのである。それは、万人の心に通底する社会性、叙情性を秘めるアンデルセンの文学だからこそ、はじめて可能なことであったといえるだろう。そのことに関して『諷世奇談 王様の新衣裳』の訳者はこんなことをいっている。すなわち、「アンデルセンは貧賤より起り、百折千磨の辛酸を経て、終には小説の大家となるに至れる者なり。故に其小説は善く人情の微をきはめ得て、何人の心にも徹りやすし」と。そして、さらに続けて「王様の新しい衣裳」についても、次のような洞察力に満ちた考察を行っている。すなわち、「此話の如きは……巧に世相を穿ち得たる者にして、之を浅く考ふれば極めて面白く、之を深く考ふれば極めて警戒となる。然れども、斯の如き寓意話は読む人の判断に任せて、別に説明を附けざるを却て妙味ありとせば、其指すところの何事なるかは、今此に述す」と。

明治の翻訳者は、こうした諷刺文学の鉄則に従って、自ら「其指すところの何事なるか」について説明を加えるようなことはしなかったが、彼らは彼らなりの方法でアンデルセンの作品に込められたメッセージを読者の心に伝えようと試みた。欧文を和

文に換えるという作業に徹しながらも、彼らが原作から引き出す解釈を、訳語の一字一字に託していったのである。その翻訳者一人ひとりの解釈の「深」「浅」をもっとも端的に、かつ象徴的に物語っているのが、「emperor」（ないしは「Grand-duc）」という語に与えた訳語である。ある人はそれを「王様」と訳した。またある人は、「皇帝」と解釈した。さらにある人は「天子」と訳した、また「領主」「大名」と翻訳する人もいた。そして極めつけは、「天皇」なる訳語を当てた人物である。どこまで意図的にそれを行ったかはわからないが、「天皇」が「白きモモヒキ白きシャツにてかひ▼▲しく手繩を取」ったなどといえれば、諷刺の鋒先は遠い異国の為政者ばかりか、日本の為政者、日本の国家元首にまで及びかねない。明治二十一年の段階で可能であったそうした翻訳が、明治三十年代にはいると次第に「領主」「大名」と当たり障りのない表現へと和らげられていくというのも、また実に興味深い事実ではないかと思う。それが、時代の進むにしたがって統制を強めていった国家の有言無言の圧力によるものなのか、そうした圧力を感じ取った個人の自主規制によるものなのか、その詳しい検証は今後の研究に譲るとして、ここで注目しなければならぬのは、アンデルセンの翻訳作品が、そうした時代の複雑な流れを写しとる鏡として立派に機能していることである。「斯の如き寓意話は読む人の判断に任せて、別に説明を附け」加えないところにかえて妙味がある。この諷刺文学理解の極意ともいべき法則に従って、明治の翻訳者はその解釈を読者一人ひとりに委ねてはいるが、訳文をよく点検してみると、欧文を日本語に置き換える言葉の端はしに、彼らの作品と向き合う態度姿勢が顔をのぞかせている。われわれはそうした訳文の一句一句に作者の考えや思想を読みとっていく必要がある、そのような行間を読み解く作業にこそ、翻訳文学研究の眼目があると考へなければならぬ。ともあれ、これは明治の翻訳文学を研究することの意義を改めて痛感させられる一事といえるだろう。

『ナショナル読本』の影響

以上、『ナショナル第五読本』と初期の翻訳作品の関係を中心に考察を進めてきたが、『ナショナル読本』がアンデルセンの受容史上に及ぼした影響は『第五読本』だけに限られるものではない。そこにはもう一つ、日本におけるアンデルセンの移入史を考える上で見落とすことの出来ない大変重要な作品が掲載されている。それは、『第三読本』に掲げられた「The Little Match Girl」という作品である。作者名が記されずにただ英文のみが掲げられているために、後世の研究者は長い間それがアンデルセンの「マッチ売りの少女」の英訳であることに気がつかなかった。前出の「児童書の会」が編纂した『明治のアンデルセン』にも言及が

ないし、日本における児童文学の歴史を俯瞰した各種年表などにも、管見したところ、そのような指摘は見あたらない。実をいうと、わたし自身そのことに気づかずにはいたために、ある著名なジャーナリストの回想録に、十二、三歳の頃学校の教室で「マツチ売りの少女」を読んで泣かされたところのあるのを見つけたときは、びっくりした。そのジャーナリストの名は長谷川如是閑。いうまでもなく、明治・大正・昭和の時の流れを鋭い目で観察してきた操觚界の大物である。その如是閑の『ある心の自叙伝』という書物のなかに、次のような若き日の読書体験が綴られているのだ。

《（私は）主として歴史ものを好んだが、しかし憂鬱のユニオンリーダーその他のリーダーも、本そのものは、日本の読本のように親しみのもたれないものではなかった。主にアンデルセンやグリムなどの古典的の童話で、子供の心に訴えるものがあつた。（一々作家の名前があつて、不明なのは「アンノイマス」とあつた。）これもアンデルセンのだったが、冬の夜にマツチ売りの少女が寒さと飢えとにふるえながら、家の庇合に野宿して、壁にマツチを擦つて、その燐光の輪のなかに湯気の立つ七面鳥の丸焼きや、母の顔や、あこがれているさまざまな幻をみたが、夜が明けるとそこに雪に埋もれた少女の凍死体があつた。というような話に、教場で泣かされた。そうかと思うと、「イサベラ・エンド・アイ」という、少年少女の淡い恋をうたつた詩などがある。……このような悲しい話や甘い話やユーモラスの話が、多くの子供の一生にどう響いたか、十人十色だろうが、日本の読本のように、その逆に行こうとする無意識の反抗を誘うようなものでなかっただけはたしかである。》

如是閑は明治八年の生まれで、「十二歳で中学程度の学校に入」ったとあるから、彼が英語読本を読んだのは明治二十一、二年の頃かと思う。その当時すでに日本の生徒はアンデルセンのマツチ売りの悲話に胸を疼かせていたというのである。これには児童文学の歴史に関心を寄せるほどのものならば多少の驚きを禁じ得ないのではないか。それというのも、これまでの通説では、アンデルセンの日本における翻訳は明治二十一年二月発表の「不思議の新衣裳」が最初であり、それ以前のものには存在しないという事になってきた。ましてや、「マツチ売りの少女」となると、明治三十五年の平尾不孤訳の『マツチ売りの小娘』までまたなければならぬというのが一般的な見方であつた。しかし、実際には平尾訳を遡ること十五年も前に、子供たちはすでにこの世

界童話の名作に親しんでいたのである。早速、事実のほどを確かめるべく、手もとの英語読本を調べてみたところ、果たして如是閑の言うとおりであった。「マツチ売りの少女」は『ナショナル第三読本』に、そして「イザベラ・アンド・アイ」と題する少年少女の淡い恋物語は『スウィントン第四読本』に載っている。当時最も広く世に行われていた『ナショナル読本』にそれが載っていたとなると、当然その全国への浸透の程度も高く、従来のアンデルセンの受容史に大きな変更を加える必要が生じてくる。

そもそもこの『ナショナル読本』という英語教科書は、明治四十五年間に発行された、ありとあらゆる書物の中でもっとも多くの読者に親しまれた書物の一つであった。アメリカでその版權登録がなされたのは一八八四（明治十七）年のことであったが、翌一八八五年には早くも日本に輸入され、あつという間に全国の教場に広まっていた。一つには、それまで使用されていた英語リーダーと比べて内容的に易しい教科書であったこと、また『ウィルソン・リーダー』のように宗教的偏りもみられなかったこと、そして、ちょうど明治十九年の学制改革の時期と重なり社会全体に英語学習熱の高まりが見られたこと等々の要因が重なって、文字通り日本の「国民読本」となっていた。明治二十五年に発行された巖谷小波の『当世少年氣質』という書物には、

ナショナルリーダー

長屋住まいの職人の倅が十二歳で高等小学校に上がって「ナショナル・リーダー」を学ぶのを、母親が得意そうに長屋中に吹聴してまわる様子が描かれている（明治十七年十一月以降、小学校においても教科に英語の初歩を加えることが認められていた）。そのような全国津々浦々の児童・生徒が、『ナショナル読本』を使って英語を学習したとなると、同テキストの一般社会への浸透はわれわれの想像を超えるものがあったと思われる。実際、現在国立国会図書館に保存されている同書の翻刻本（日本の出版社から発行された同一内容の組本）を調べてみても、『第一読本』から『第五読本』まで五冊あわせた総数は九十七種類にも及んでいる。もちろんすべて版元の異なるもので、その多くが五版、十版と版を重ねているという事実を考え併せると、おそらく、明治期最大のベストセラーといわれる中村敬宇の『西国立志編』の発行部数をも凌ぐ勢いであったと想像される。

このような高い普及率を誇る英語教科書にアンデルセンの作品が載っていたということは、同作品の受け入れ状況にも当然大きな影響を及ぼしたとみななければならない。いまその影響を詳しく分析してみるに、それには大きく分けて次の三点があったと思われる。第一に、『ナショナル読本』に掲載されたアンデルセンの作品は、英訳というかたちではあるが、原書を通じた直接的なアンデルセンの受容の一種と見なせるもので、そうした翻訳作品によらない直接的な受け入れにそれが貢献したということ。そして第二に、同リーダーに掲載されたアンデルセンの作品からいくつかの翻訳作品が生まれて、間接的な受容にも影響を及ぼ

した。そして第三に、そこから本来の翻訳作品とはまた違った別種の翻訳が生まれ、それもまたアンデルセン童話の普及に寄与したことの三点である。

このうち、最初の二点については前に詳しく述べたのでここでは省略するとして、説明を加える必要があるのは最後の「別種の翻訳」が生まれたという点である。ここにいう「別種の翻訳」とは、『ナショナル読本』など当時の英語リーダーに語注と訳文をほどこした学生用の教本に掲げられた翻訳のことをいう。そうした訳注の掲載された教本は、普通「何々リーダー直訳」「何々リーダー独案内」などの文字を伴うことから、総称して「直訳本」と呼ばれているものである。明治の世にこれらの直訳本がどれほど多く出まわっていたか、それを確認するには、『ナショナル読本』に例を取るのが最もわかりやすいだろう。先にも記したとおり、現在国会図書館に所蔵されている『ナショナル読本』の翻刻書の数は全部合わせて九十七種類であったのに対して、同書の直訳本はそれを上回る百十七種類のもので所蔵されている。つまり、明治の英学生にとって、直訳本は英語リーダーを繙く際の必携の書であったということになる。十分な学識を備えた教師の数が限られていた明治の世にあつては、学生は自習書を頼りに独習する以外になかったのである。

これを「マツチ売りの少女」の掲載された『ナショナル第三読本』でみると、翻刻書の数は全部で十五冊、その直訳書に至っては、実に二十五種類もの異なる版が国会図書館には所蔵されている。これらの自習本は、「直訳」本とはいえ、なかには「直訳」、「意訳」の両方を併載するものもあり、必ずしも一般の翻訳作品と比べて劣った内容のものばかりではない。発行された年月の上からみても、これまでに発見されているアンデルセンの翻訳で最も古い明治十九年二月発表の「マツチ売りの少女」の「直訳」も見つかっている。いま、それらの「直訳」をも翻訳作品の一つとみなすならば、明治期のアンデルセンの翻訳史は、大きく塗り替えられなければならないことになるだろう。少なくとも、英語リーダーに掲載されたそれらの「直訳」を抜きにして、日本におけるアンデルセン受容の全容に迫ることはできないのである。

ともあれ、それがどのような訳文なのか、例を一つ「The Little Match Girl」の原文とともに以下に掲げてみることにしよう。

It was very cold; it snowed, and was beginning to grow dark, and the last night of the year, too—New Year's Eve.

In the cold and darkness, a poor little girl was wandering about the streets with bare head and bare feet.

【川瀬清太郎訳「小サキ燧火木壳ノ女兒」〔明治十九年二月刊〕】

《其レガ甚ダ寒クアリシ、其レガ雪降りシ、而シテ暗クナルベク始メツ、アリシ、而シテ、其レガ又タ大晦日ノ夜デアリシ
（紐育今夕新聞）ノ寒サ及ビ暗サノ中ニ、憐レナル小サキ女兒ガ裸頭及ビ赤脚ヲ以テ、街ヲ吟行ヒツ、アリシ》

【元木貞雄訳「小サキ引火奴壳ノ童女」〔明治二十年七月刊〕】

（直訳）

《其レハ甚ダ寒クアリシ、其レハ雪降りシ、而シテ暗クナルベク始メツ、アリシ、而シテ其レガ亦、新年ノ夕ナル年ノ終リ
ノ夜デアリシノ寒サト、而シテ暗黒ノ中ニ、憐レナル小サキ娘ガ、露頭ト、而シテ跣足ヲ以テ、街衢ヲ徘徊シツ、アリシ》

（意訳）

《時維レ寒凍ニシテ、雪フリ、且ツ方サニ夜ニ入レリ、是レ歳ノ除夜ニシテ即チ新年ノ前タナリキノ一人ノ貧窮憫レムベキ
童女、頭ニ帽ナク、足ニ靴ナクシテ、此ノ暗夜寒氣ヲ冒カシテ街衢ニ徘徊シ居タリ》

ここに示した文章を読んで誰もが懐く印象は、実に機械的な翻訳であるということだろう。原文の意味などはほとんどお構いなしに、「it」とくればすべて「其レ」と自動的に訳語が当てられる。天候や時間を表す非人称の「it」であろうと、そんなことはいつさいかまわない。「and」ならば、すべて「而シテ」、「be」動詞は「アル」、そして進行形は「ツ、アリ」、過去形は「シ」と置き換える。形容詞に用いられる語彙までがほとんど決まっただけで、「very」は「甚ダ」、「poor」は「憐レナル」と置き換えられる。ほかに残された作業といえば、そのような機械的な操作を通して出来上がった枠の中に、頻出回数のない名詞や動詞の訳語を当てはめていくことだけだ。たとえば「bare head」を「裸頭」「露頭」、「was wandering」を「吟行ヒツ、アリシ」「徘徊シツ、アリシ」といった具合である。そうした中で、偶々訳者に理解できない単語が出たりすると、それはもうびっくりするような訳語が飛び出してくる。たとえば、最初の文章の終わりに括弧付きで「（紐育今夕新聞）」とあるので、何でこんなところに新聞の名が出てくるのかと思っただけで原文をみると、それが「New Year's Eve」に当てられた訳語だということが判るのである。例の

「Christmas Eve」の「Eve」が「前夜」の意味が訳者には理解できなかったのだろう、苦し紛れに「Evening News」の意味に解釈し、こんな珍訳の出現につながったものと思われる。しかし、中にはそうした個性豊かな(?)誤解もあるが、全体としてはいたって平板な機械的な翻訳という印象が強く、まさにこれぞ「直訳」の見本といってもいいような文章ではないかと思う。川瀬訳も元木訳も、中に出てくる表現や統語法がほとんど同じということは、むしろそうした語法の統一性にこそ直訳書の眼目があったと考えなければならぬだろう。

これらの訳文を見てもわかるように、英語リーダーの「直訳」というのは、文学作品を鑑賞するためではなくて、原文の意味を理解するために作られた便宜的な翻訳であった。しかし、だからといって、ここに示したような「直訳」が西洋文学の移入史上全く意味をもたないものであったかという点、必ずしもそうではない。とくにそれが発表された明治二十年前後の翻訳文学の水準というものを考えると、それらの訳文だって立派に翻訳作品として通用するのである。当時の日本文学界は、よく知られるように、いまだ進むべき将来の方向さえ見いだせていない混沌期にあった。翻訳文学においても、今日のわれわれの目からするとどうしてこれが翻訳かと疑いたくなるような杜撰な訳がまかり通っていた。「意訳」「纂訳」「戯訳」「豪傑訳」と、なんでもござれの当時の翻訳文学界にあつては、彼らの愚直なまでに原文に忠実な訳文は、むしろ貴重な存在であつたといえるだろう。いつてみればそれは、当時の翻訳文学界における「地の塩」的な役割を果たしていたと考えることができるのである。そればかりではない、上に引用した元木の訳文、とりわけその「意訳」を見てもわかるように、単なる直訳の域を超えた優れた翻訳も存在したのだ。初期の英学生に、あるいは翻訳文学者に、何よりも原文に忠実なことを教えたという点で、彼らの翻訳は立派にその存在理由を有していたのである。

しかし、翻訳作品としての価値もさることながら、われわれが注目しなければならないのは、それらの直訳が『ナショナル読本』の普及のあとを裏づける貴重な証拠となつているという点である。いま、わたしの手もとにある元木訳『ニューナショナル第五読本直訳』の奥付を見ると、明治二十四年五月に初版が発行され、それ以降明治三十九年十一月までの十五年間に十一回も版が重ねられたとある。上級の『第五読本』でそれだけであつたということとは、『第三読本』の直訳本となるとさらに多くの版が重ねられたと思われる。そうした直訳本が『第三読本』だけでも二十五種類も出回つていたというのだから、それをもとに勉強した学生の数も相当なものであつたに違いない。われわれが考えてみなければならないのは、単に学生の数だけではない。同時

にそれが、一人一人の心に深く沁みこんで彼らの精神形成に大きな影響を及ぼしていったということにも、関心を向ける必要がある。これは、『英語青年』の編集に長年携わってきた喜安□太郎が伝える話だが、第二次大戦たけなわの昭和十九年のある日、彼のもとに以前女学校の校長を勤めたという七十歳の老翁が訪ねてきて、自分は今でも昔習った英語読本を忘れないと、『ナショナル第三読本』の一章を一字一句違えずに誦んじてみせたという。西洋の文物への憧憬の念の強かった明治時代には、英語教科書に掲載された話の内容がそれを読む学生の心に生涯忘れられないほどの影響を及ぼすこともあったのである。

わたしはかつて、舶来の英語教科書が明治の文学者たちに及ぼした影響の跡を探るために、明治前半に学生時代を過ごした作家の回想記や自伝的作品を詳しく調べてみたことがある。それは、たとえば、徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』や永井荷風の「歓楽」、あるいは木下尚江の『良人の自白』というような作品であったが、そうした自伝的傾向の強い作品の中に、英語教科書は、ときに自己の恋愛観を形成する糧として、あるいは将来の方向を決定する予言の書として、さらには恋人との心を結ぶ仲立ちとして、登場してくるのである。いずれの場合もそれは彼らの精神形成の過程や内面史に深く関わる重要なフアクターとなっており、多少大げさなもの言い方を許してもらえば、明治期の、とくにその前半の英語教科書というのは、その頃中学校で学んだ経験のある者にとって永遠に忘れることのできない青春の記念碑ともいべき書物であったといえることができるのである。

そのような書物の中に、アンデルセンの「マツチ売りの少女」や「王様の新衣裳」が掲載されていたということは、西洋文学の移入史を研究する者にとって二重の意味で忘れがたいものがあつた。まず第一に、様々な資質や適性を備えたほとんどすべての中学生がそれを読んだということである。全国津々浦々の英学生が読んだということは、中にはそれによって西洋童話の真のおもしろさに目覚めた生徒も少なからず存在したはずである。彼らに西洋童話の本当のおもしろさを教えるのに外来の英語教科書ほど大きな役割を果たしたものはない。そして第二に、それが日本の翻訳者の手が加わらない英訳の作品であつたということである。周知の通り、日本国家の教育に対する干渉は、時代が明治二十年、三十年と進むにつれて、次第に激しさを増していった。諸々の教科書にまでその統制が及ぶ中で、舶来の英語リーダーは唯一その干渉を免れた安全地帯といつてもいいものであつた。そこでは「emperor」はあくまで「emperor」であつて、妙なほかしや改作の手が加えられることはなかつた。恋愛に関する文章もまたしかりで、永井荷風は、前出の「歓楽」という作品の中で、主人公に、自分は中学校の英語教科書で西洋の悲恋物語を読まなかつたら「確かにあんな感情の早熟を見はしなかつたらう」と言わせている。このように当時の英語の教科書というの

は、生徒たちがそこから欧米の生きた思想や考え方をじかに吸収することのできるほとんど唯一の窓口となっていたもので、日本の読本が、それを読む子どもたちに「その逆に行こうとする無意識の反抗を誘」っていた（如是閑の言）のとは、大きな違いがあった。われわれは、明治の児童・生徒に西洋童話の神髄を、そしてさらには、西洋文学の神髄を教え込むのに貢献した、『ナショナル読本』をはじめとする各種英語リーダーの役割にもっと大きな関心を払ってみなければならぬだろう。